蒼き鳥人な心剣士

ヴァールシャイン・リヒカイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼き鳥人な心剣士

【Ｎコード】

Ｎ０５４９Ｘ

【作者名】

ヴァールシャイン・リヒカイト

【あらすじ】

シャイニングシリーズが大好きで書きました。投稿の仕方がまだよくわからなく、おかしいとこはありますが、よろしくお願いします。

設定

主人公
レイファー・ソウキュウ
性別
男

年齢
原作前２２歳
原作開始２５歳

所属
通商連合国家セイラン

種族
バードリング（オオルリの鳥人）

クラス
心剣士

身長
１８５ｃｍ

体重
８０ｋｇ

ＣＶ
梅津秀行

能力
ニュータイプ
ゲームの技を再現する力
膨大な体力と精神力
テイルズの魔術が使える
能力や形を創造して武器を作れる

アイテム
ヒーリングジュエル
ヴァンピリックブレス
ダイアモンドチャーム

武器
マジックソード改（売られてるマジックソードを強化した剣。腰に装着している）
天空蒼翼刀（刃が青い炎で出来ており、刀身が翼の形をしている剣。腰に装着している）
ツヴァイ（黒と灰色でカラーリングされている剣。イメージはＳＲＷＡのツヴァイザーゲインの闇刃閃の時に使う剣。腰に装着している）

戦闘スタイル　片手剣や双剣で闘うがツヴァイザーゲインが使う攻撃のような闘いを好む

ＢＧＭ
極めて近く、限りなく遠い世界に
ＣＨＡＯＳ

プロローグ（前書き）

いよいよです

プロローグ

ここは…どこだ
私は車と衝突して死んだはずだ
それにこの白い空間は一体…
？「それは、俺が説明しよう」
このような場所からすると神様、か？
神「察しがいいな、ここは次元の狭間だ。お前は車と衝突して死んだんだがな……」
神は黙りこむと、突然頭を下げて

神「すまん！此方のミスでお前を死なせてしまった、本来ならお前はまだ行きてるんだ」
謝罪してきた。
それで、私はどうなる？
神「お前を異世界に転生させる。」
わかった
神「此方のミスだからな、特典をやろう。転生する世界はシャイニングウィンドだ」

ならば種族をオオルリの鳥人にして声を梅津秀行にして能力は、ニュータイプとゲームの技を再現する力、膨大な体力と精神力、ティルズの魔術が使えて、魔術と素材を使って武器を創造する力でアイテムにヒーリングジュエルとヴァンピリックブレス、ダイアモンドチャームをもらおう

神「わかった、用意しておこう。では、心の準備はいいか」
ああ
神「我　神が　命ずる　魂よ　新たな　世界へと　転生せよ！」

そう神が叫ぶと私の意識は遠退いていった。

プロローグ（後書き）

え～と

グダグダですいません

1話　エンディアスに転移

シャイニングウィンドの世界に転生して２０年たった

私の名前はレイファー・ソウキュウだ。両親は居なく、孤児院の前に置かれていたんだ。言い忘れたが、転生した場所はエルデだ　。

そんな私は今、孤児院の跡地にいる。

戦争のせいで皆死んでしまい、私だけが生き延びた。

レイファー「…先生、皆よ……元気に過ごしているか、私は元気に過ごしているよ…」

墓に持っている花束を添える

レイファー「……なぁ先生、皆、…大事な…話があるんだ」

真剣な表情で墓を見つめる

レイファー「私はもう…この場所には来ない、いつまでも…引きずるわけ訳にも…いかんからな……だから、最後の別れの言葉をいいに来た…」

私に名をくれてありがたとう

私と友になってくれてありがとう

私を……育ててくれてありがとう

皆、先生…さよならだ

あれから2年の月日が流れた。
私は孤児院の先生が残してくれた金で生活してる

住んでいる場所がルミナス学園の近くのため、原作メンバーのキリヤ、シーナ、ソウマ、トライハルト、ヒルダと多少知り合いだ

おそらく私もエンディアスに転移する可能性があるだろうから、神から授かった能力を使いこなせるように訓練した

中でも私は前世の頃から好きだったＳＲＷＡのヴィンデル・マウザーが搭乗したツヴァイザーゲインの攻撃が再現できるように血が滲む訓練を繰り返した

闇刃閃や麒麟・極を再現するのは大変だな。

他にも、残影玄武弾、重虎咆、邪竜鱗をマスターし、ソウルゲイン、ヴァイサーガ、グランゾンの攻撃をマスターできた。懐かしいな…

そんな数年前のことを思いだしてるといつのまにか朝になっていた

どうやらずっとこのままだったようだ。

時計を見ると０７：００

朝食の用意をせねばな

朝食を食べ終えて私は必要な荷物を集めた
天空蒼翼刀、私の誇りの一つでるツヴァイを腰に装着し、ヒーリングジュエルとヴァンピリックブレス、ダイアモンドチャームを身につける。そろそろ転移するだろう、私の勘がつげた。

レイファー（…何かが違う、何時もの空気ではない強い何かを感じる。…）

レイファーがそう考えて、ふと池の方を見るとそこには

夜でもないのに

赤い月が水面に浮かんでいた

レイファー「！！来たか……」

そう呟くと意識がなくなっていった

1話　エンディアスに転移（後書き）

うーん
２ページ、３ページとか使いたいんだけどやり方がわからない。
何方が教えて下さい

2話　蒼き翼と海賊王（前書き）

お頭と
遭遇

2話　蒼き翼と海賊王

レイファー「ぬぅ、ここは…エンディアスなのか」

レイファーが目覚めると周りにエルデにはめったにない木や岩などがある
レイファー「天空蒼翼刀とツヴァイはある、服装もちゃんとなっているか…」
自分の状況を確認すると現在地を考える。
ちなみにレイファーの服装はＳＲＷＡのヴィンデル・マウザーが着ている物と全く同じだ。

レイファー「さて、どうするか……」

そう呟き目の前を見る
すると草むらが揺れて

魔「グガァ！」
レイファー「モンスター、か、面倒だな」
そこには、スケルトン、ゴブリン、ホブゴブリンが3体ずつ、合計9体現れた。
レイファー「まあいい、相手になってもらおう」天空蒼翼刀を構えて
レイファー「貴様らの命は、我が掌中にあり！！」
モンスターに向かっていった

まず、向かってきたゴブリンを斬り付ける。体制が崩れたとこをねらって拳で殴り飛ばし、
負傷したゴブリンが残りのゴブリンを巻き込んで飛ばされる
魔「グギャアア！」
魔物が叫ぶと動かなくなった。
レイファー「残り、6体」
そう言い

ザンッ

魔「がぁぁ！」
レイファー「5体」
ザンッ

魔「ぎゅああ！」
レイファー「4体」
ザンッ

魔「グギャア！」
レイファー「3体」
ザンッ

魔「がぁぁ！」
レイファー「2体」
ザンッ

魔「ぎゃあ！」
レイファー「残るは1体」最後に残ったスケルトンは逃げようとす

るが

レイファー「逃さんぞ！」天空蒼翼刀を戻し、ツヴァイを構えてスケルトンに向かう。
レイファー「受けよ、我がツヴァイの刃を」
実体のある分身と共に斬撃を左右から、上から、斜めから何度もくらわせる
レイファー「これが我が奥義」
最後に実体の私がツヴァイを構えてスケルトンを斬り捨てると同時に分身が上からツヴァイで突き刺す。
レイファー「闇刃閃！！」スケルトンは声出すことなく絶命した。
同時に分身達は消えた。

周りにはモンスターの血が水溜まりのようになっている
レイファー「まだまだな…私も」

さて、これからどうするか……
そう考えていたら

？「見事な腕前じゃねぇか」
振り向くとそこには鍛え上げた肉体
低めの渋い声
顔に×の傷がある黒い狼獣人の男
忍びの風貌をした白い鴉鳥人の男
数人の獣人

レイファー「あなた方は…」
？「俺はロウエン、この白い鳥人はジンクロウ、こいつらはジンクロウの部下だ」
海賊王ロウエンだった

ロウエン「おめぇの名は」レイファー「レイファー・ソウキュウです」
ロウエン「レイファーかいい名前じゃねぇか」
レイファー「ありがとうございます」
ロウエン「レイファー、さっきのことでおめぇと話しがある、ついてきもらうがいいか？」レイファー「はい、大丈夫ですが、なぜですか？」
ロウエン「訳ありに見えるからだ、それとこの場所じゃさっきのようにモンスターが出てくるのとな…」
ロウエンが一息おいて

ロウエン「実力者のお前と話しがしてみたいからだ」レイファー「そうですか…」
ロウエン「さ　、ついてこい、行くぞ」

レイファーはロウエンについていった

レイファー「あの、…」
ロウエン「ん、どうした」レイファー「いつから見ていたんですか？」
ロウエン「ああ、おめぇがモンスターと対峙した時からだ。ジンクロウを向かわせようと思ったら、おめぇが全部かたずけてしまったからな、ガッハッハッハッハ。」
レイファー「そ、そうなんですか……」
ジンクロウ「うむ、お主が全て倒したから出る必要はなかったがな」
ロウエン「だから、ちゃんとした場所で話しを聞こうとな、こんな場所じゃ落ち着いて話しもできねぇよ」

話しているうちに目の前に大きな港町についた

ロウエン「ついたぜ、我らが都、セイランに」

3話　出会う翼と最初のパートナー（前書き）

心剣が抜けます
最初のパートナーです

3話　出会う翼と最初のパートナー

セイランについたレイファーはドレイク城につれてこられていた

ドレイク城　玉座の間

ロウエン「改めて自己紹介をしよう」
周りにはセイラン五獣将、ロウエンの隣にジンクロウと宰相シュマリがいる。玉座に座るロウエンから威厳を感じるレイファー
ロウエン「通商連合国家セイランの国王であり、海賊王と呼ばれる、セイラン王ロウエンだ」
・・・・・・・・
レイファー「国王?！さ、先ほどは失礼な喋りを」
ロウエン「気にするな、此方も名乗らなかったからな。さて」
ロウエンが此方をみて
ロウエン「俺のことをおめぇは知らなかった。この大陸に俺の名前を知らないやつはいない、他の大陸の者だとしても名前は知ってるはず」真剣な表情で見つめ
ロウエン「レイファー、おめぇはどこから来た」

レイファー「（正直に言おう）わかりません、自宅にいて突然意識をなくして、起きたらあの場所にいました」
ロウエン「何かなかったのか？」
レイファー「特に何も…強いて言うなら自宅の池に赤い月が映っていたぐらいです」
その言葉に
シュマリ「赤い月だと！」シュマリが驚いた

ロウエン「シュマリ、何か知ってるのか？」
シュマリ「はい、過去にエンディアスに来たエルデの民は来る直前全員赤い月をみたそうです。彼、レイファーもエルデの民かと」
ロウエン「エルデ、か」
レイファー「あ、あの…」ロウエンにレイファーが話しかける
レイファー「エルデとかエンディアスとは…」
ロウエン「ああ、この世界の名はエンディアス、エンディアスには異世界から人や物が転移してくる場合がある、お前もそのようだ」
レイファー「そうですか…」
その様子にロウエンは尋ねる

ロウエン「なんだ、帰りたいとは思わんのか？」
レイファー「私はエルデで全てを失いました。……友、帰る場所だった孤児院、拾ってくれ名をくれた先生。墓に眠る皆には別れを告げています。エルデに未練はありません、それに自分の未来は願わくば自分で選びたい、ですからエルデに帰るつもりはありません。このエンディアスで骨を埋めたいと思っています」
ロウエン「…死んだ原因は」
レイファー「戦争です。戦火に巻き込まれて死にました。あれは戦争でしたから、親しい者が死んでもおかしくありません、覚悟は決めていました…」
シュマリ「…お前は強いな」
話しを聞いていたシュマリが語りだす
シュマリ「私も同じさ、前にこのリーベリアの大陸で戦があった、…そこで私を除いて多くの狐獣人（フォックスリング）が死んだよ。」
レイファー「ですが人は、乗り越えることができると思います」
その言葉にシュマリは
シュマリ「そうか…そうだな」
何かを吹っ切れた表情をしていた

その瞬間

シュマリから光と陣が発生し胸から剣の柄が現れた
ロウエン「心剣！」
レイファー「これは…柄？」
シュマリ「……受け取れお前になら心と背中を預けていい」
柄を握るレイファー
レイファー「強くて、大きな物を支えるような暖かい心…これが貴方の心……」シュマリ「預けても…いいかな」
レイファー「ああ、貴方の心、預かります！」
シュマリから心剣を抜く

鋼色の刃、透き通る様な彩色をしたフォックスリングの９本の尻尾を促す飾り

レイファー「これが…」
ロウエン「稀にエルデから心剣を抜く者、心剣士が現れる（何か起ころうとゆうことか）」
心剣を持っているレイファーに
ロウエン「心剣士はカオスゲートと呼ばれる次元のひずみを封印浄化できる。カオスゲートは、中からから溢れ出した混沌と闇のエネルギーが大地を蝕む、レイファー、お前はエルデに未練がないと言ったなな、それは本当か？」
レイファー「はい…」
ロウエン「なら、話しは早い、セイランに仕えないか？」
レイファー「…よろしいので？」
ロウエン「おう、おめぇはエンディアスで永住するんだろう、ならここに住み名、幸いにもここは獣人の国だ、心配するなおめぇの部屋は用意させるし、何よりもあれだけの実力者は欲しいからな、どうだ？」
その言葉に

レイファー「（原作とは違うな平行世界のようだな。異世界から来た私にロウエン王はここまでしてくれる…そんな者に私は仕えたい）」
ロウエンに向かって頭を下げて
レイファー「よろしくお願いします、王」
その言葉に
ロウエン「そうか、なら改めてようこそ」
レイファーに伝える

ロウエン「通商連合国家セイランにようこそ」

3話　出会う翼と最初のパートナー（後書き）

個人的に
シュマリはヒット＆ａｍｐ；アウェイタイプだと思います

４話　シュマリとジンクロウと五獣将に挨拶（前書き）

シュマリとジンクロウと五獣将の皆で軽い自己紹介です
エンウとは非常に仲がよくなりそうです

4話　シュマリとジンクロウと五獣将に挨拶

ドレイク城の会議室にて

レイファー「私は、レイファー・ソウキュウです。レイファーとお呼びください」
シュマリ「そう言うな、普段通りでいい」
レイファー「わかった」
シュマリ「此方も自己紹介をせねばな、私はシュマリ、セイランの宰相を勤めている」
ジンクロウ「ジンクロウだ。よろしく頼む」
エンウ「拙者は五獣将の長、エンウだ」
バソウ「五獣将のバソウだ」
コウリュウ「五獣将のコウリュウじゃ。よろしくのう」
ライヒ「五獣将のライヒだぜ。よろしくな」
ヒョウウン「おれは五獣将の1人、ヒョウウンだ、よろしく頼むぜ」

挨拶も終わり会議室の窓から外を眺めて

レイファー「ここは、よい場所だな」
「そうだろう」
声が聞こえて振り返るとエンウがいた
エンウ「レイファー殿は海が好きなのか？」
レイファー「海もいいが、やはり空だ」
エンウ「うむ、あの空を駆けるは気分が良いな」
レイファー「そうだな…」エンウ「これからよろしく頼むぞ」

レイファー「ああ、此方こそ。そうだエンウ殿」
ふと、あることが思い浮かんだレイファーは、出ていこうとするエンウに声をかける
エンウ「いかがした？」
レイファー「貴殿なら使いこなせるだろう」
そういって渡したのは複数の奥義書
エンウ「！！感謝する、習得する時は、ご教授を願いたい」
レイファー「もとよりその気だ」
エンウとレイファーは手をがっしりと握った

４話　シュマリとジンクロウと五獣将に挨拶（後書き）

エンウに渡した奥義書は
「鳳凰天駆」、「翔凰烈火」、「皇王天翔翼」です

5話　セイラン軍と国民に挨拶、そして自分の役職（前書き）

レイファーの地位がすごい・・・

5話　セイラン軍と国民に挨拶、そして自分の役職

セイランに来て翌日の夜

ドレイク城会議室

レイファー「挨拶…ですか」
ロウエン「おう、おめぇのことを民と兵は既に知ってる。昨日の内に説明して明日に挨拶するビラを貼る、兵を使って説明させておいた。明日には民と兵の前で正式に紹介する」
レイファー「わかりました」
ここまでは良かったのだが次の言葉に

ロウエン「それとお前の地位だが、セイラン軍の元帥を任せたい」
レイファー「げ、元帥を！？」
当然驚く
ロウエン「あれだけの実力だ、そこらの地位では示しがつかん。それに今は、心剣士の仕事はない。お前には、元帥となってセイランの首都ハンヨウの防衛任せたい。上層部も納得している、どうだ？」
レイファー「その任、承りました王」
ロウエン「わかった、自己紹介と軽い演説をしてやれ、お膳立てはしてやる…俺が直々にスカウトした人物としてな」
にやっとする
レイファー「演説の内容は、セイランに対する思いで宜しいでしょうか？」
ロウエン「ああ、もう戻っていいぞ」
レイファー「失礼します」

レイファーはあてがわれた客室にいる
レイファー「まさかの元帥か……やってやるさ」

翌日

ドレイク城の前にに大勢のセイラン兵と民が集まっていた

ロウエン「おめぇらに集まって貰った理由は他でもねぇ、おめぇらも知ってると思うが俺はある男をスカウトとした、紹介しよう、心剣士レイファー・ソウキュウだ！」
心剣士という言葉に騒つく

レイファー「紹介にあった、レイファー・ソウキュウだ！」
ロウエン「こいつは武人として、人として素晴らしき才能を持っている、故にこいつをセイラン軍元帥に任命せる！レイファー、おめぇの思いを語れ！！」
レイファーが真剣な表情で

レイファー「皆も知ってると思うが私はエルデからやってきた、そして偶然か運命か心剣士の力持っている。エンディアスに来た私は居場所がなかった、しかし！、ロウエン王は私を受け入れ、心剣士ではなく、私自身レイファーを見てくれた！。そんなロウエン王のために私は力を使いたい。闘う理由は、愛する者、家族、人の数だけある。若輩者の私だがセイランのために死力を尽くそう。兵よ、民よ、共に生きよう、セイランと共に明日を生きるために！！」
「「「「うおぉぉぉぉぉぉ、レイファー元帥！！」」」」
「「「「レイファー大将！！」」」」

ロウエン「これで紹介を終える、解散！」
なお、この演説は「セイランの誓い」として後世に伝えられることになる

ドレイク城　玉座の間

ロウエン「がっはっはっはっは、「セイランと共に明日を生きるために！！」っか、かっこいいねぇ、後世に伝えられるぜこりゃあ」
レイファー「ありがとうございます、王」
ロウエン「お前の部隊は明日の朝、城の広間に集める、してもらいたい仕事内容は後でお前の私室に届けさせる。以上だ、下がれ」
レイファー「はっ、失礼します」

玉座の間から出たレイファーは、外に待機していた副官のトンビ鳥人のレンクに新しいへや、自分の私室に案内させる。
レンク「着きました、ここが元帥の私室でございます中に城とハンヨウ、セイラン国の地図があります」
レイファー「感謝する。下がっていいぞ」
レンク「御意、失礼します」
レンクが後にしたあと部屋を見渡してみる。広めな部屋、２人分は余裕なベット、仕事用の机と本棚、プライベート用の机と本棚、物置スペース、更に水道、キッチン、小さめの冷蔵庫がある
実はお茶、珈琲、紅茶が好きだ
…王もよくやってくれるな。
仕事用の机に座り、城とハンヨウとセイランの地図に目を通す

位置を把握したところで時間を見ると１２：００
とりあえず道具や生活用品の買い出しの準備をすると同時に昼を食べようと思った時

コンコン

レイファー「どうぞ」
？「失礼する」
中に入ってきたのはジンクロウだ
ジンクロウ「名演説だったなレイファー」
レイファー「茶化すな、で何のようだ」
ジンクロウ「ロウエン王からお主にやってもらいたい仕事について書かれた書類とお主のハンコを持ってきた確認しておけ、拙者はこれから仕事だ、では」そう言うとジンクロウ書類とハンコを置いて出ていった

レイファー「書類を確認するか…」
確認すると私の仕事は五獣将がセイランの各拠点を守護しているように、私は首都ハンヨウの防衛を任された。
週に軍学校に2～4回は顔を出す。　これが私の仕事だ、最後の方に今日は私生活に必要な道具等の買い出しをしておけと記入されていた。
町に出て定食屋で昼食を食べた。店員がびっくりしていたな
再び町に出て買い出しを始める。

2時間後には道具は揃った

本、湯飲み、カップ、服屋に行き私が今着ている服を発注、茶菓子、下着（褌）、手帳、ノート、ペン、インテリアを購入

ドレイク城の私室に戻り購入したものを収納し、インテリアを設置

する。

机に座り

レイファー「明日は部下と対面、か」

部下のことを思いながら一息ついた

5話　セイラン軍と国民に挨拶、そして自分の役職（後書き）

ちなみにアドバンス版のＳＲＷＡのラスボス、ツヴァイザーゲインの装甲は、３５００あります

6話　部下と対面、蒼天の翼が闘う力を身に付けた理由

翌朝

レイファーは指定された城の広間部下のレンクと共に向かっていた。

レイファー「レンク、皆の様子は？」

レンク「元帥の部下になるので緊張していますな。落ち着かせるのが大変ですよ」

レイファー「護衛部隊長のお前も大変だな…」

私の部下になるのは以前からセイランの防衛、見回りをしている3つの部隊。レンクは私の護衛と補佐をする護衛部隊の部隊長である。

喋りながら歩いていると広間の前にたどり着いた

レンク「では先に行きますので、お呼びしたら出てきてください」

元帥が来るとあって皆落ち着かない様子だ。

「はぁ、緊張してきた」

「俺もだぜ…」

レンク「全員、静まれ」

レンクの声が響きわたり静かになる

レンク「私は、元帥の護衛と補佐をする護衛部隊の部隊長、レンク

だ。よろしく頼む。皆も知ってるが我々は今日という日を持って、元帥の部下になる。では元帥、お入りください」

ゆったりとした歩きで部下になる者達の前に移動する。

レイファー「諸君、私が、ロウエン王より元帥の地位を承ったレイファー・ソウキュウだ」

一息おいて

レイファー「今日を持って諸君達は、私の部下になるわけだが…」

一息ついて

レイファー「私はまだ知らない、君達のことを、君達もあまり知らない、私のことを……だが、セイランで生きるという同じ共通点がある！……これから長い付き合いになるだろう、時間を掛けてでも互いにわかりあい、セイランと共に明日を生きよう！！……私の話は以上だ！」

部下とは長い付き合いになるため互いに時間を掛けてわかりあおうと説明したレイファーだった

レンク「では、以上を持って対面式を終了する。各自、仕事に戻れ、

解散！！」

レンクの号令と共にそれぞれ仕事場所に向かう。対面式を終えたレイファーは、私室に戻り仕事を始める

コンコン

シュマリ「私だ、シュマリだ」
レイファー「ああ、入ってくれ」
シュマリがレイファーの私室を尋ねてきた

シュマリ「今、いいか？」
レイファー「大丈夫だが…」
シュマリ「茶菓子でも食べながら話をしないか？」
持ってきた茶菓子を机に置いて喋る
レイファー「いいだろう、ちょうど休憩しよう思ってた」

シュマリ「…ということがあってな」
レイファー「それは傑作だな」
シュマリ「はっはっは…そういえばレイファー」
レイファー「なんだシュマリ？」
お茶を飲みながらシュマリがレイファーに尋ねる

シュマリ「お前は何故力を手にした？」
レイファー「力、か……」一息ついて語る

レイファー「皆が死んだ時に私は何もできなかった…その頃から鍛えていたがな、逃げることで精一杯だった」
今でも覚えてる、あの日のことは…
レイファー「私はそれが悔しかった、何もできなかった自分がな。それからは時間が有るたびにひたすら特訓をした、雨の日、嵐の日、雷の日、雪の日もな…おかげで今の私がある」
自分の思いをシュマリに話た

シュマリ「…何処までも似ているな、私達は…」
レイファー「ああ、そうだな」
シュマリ「今度飲みに行かないか？」
レイファー「頼むよ」

蒼天の翼は狐と改めて友になり、理解しあった

6話　部下と対面、蒼天の翼が闘う力を身に付けた理由（後書き）

レンクの実力は五獣将の二歩手前ぐらいです

7話　蒼天の翼、仙女ホウメイと出会う　前編

エンディアスで生活して2ヶ月はたった頃、レイファーはロウエンに呼ばれていた

ドレイク城玉座の間

ロウエン「レイファー、そろそろおめぇもホウメイに顔合わせをしねぇとな」
レイファー「ホウメイ…竜泉郷（コンロン）にいる仙女ですか…」
話を聞くとセイランのほとんどの者がホウメイのことを知っているとのこと

ロウエン「ああ、まだ顔合わせはしてないからな、向こうは知っているだろうけどよ」
レイファー「いつ向かえばよろしいでしょうか？」
ロウエン「明日の午前中にだ、午後からやってもらいたいことがあるかな、下がれ」

玉座の間を後にしたレイファーは自室に向かった。途中あったレンクの部下に「レンクに私の部屋に来るように伝えてくれ」と伝言を頼み自室に向かう

自室についたレイファーはソファーに座りレンクを待つ

コンコン

???「失礼します、レンクです」

レイファー「ああ、入ってくれ」

レンクが扉を開けて中に入ってくる。ソファーに座るように言い話を始める

レンク「レイファー元帥、本日はどうされましたか？」

レイファー「実は、明日の午前中の間に竜泉郷のホウメイどのに挨拶をしに行くことになってな９時に出発しようと思う、護衛の者を４、５人選抜しておいて、８時半にこの部屋の前にお前を含めて集まってもらいたい、できるか？」

そう伝えるレイファーにレンクは答えた

レンク「わかりました、８時半ですね、腕に自身のある者を集結させます」

レイファー「頼もしいな」ふとここであることを思い出す

レイファー「（そういえば、確かレンクはお茶が好きだったな）レンク、いいお茶があるのだが飲んでいかないか？」

レンク「（ピク）お茶ですか？」

少し反応したレンクに思わず心の中で笑ってしまうレイファー

レイファー「私の好きなトオゲンの抹茶玄米茶だが…」

トオゲンとはセイランにあるお茶、紅茶、珈琲やその他の物を販売してる店の名だ。高価格な物から低価格の物まで売っている。ちな

みに私はお得意様でトオゲンの抹茶玄米茶は高価格で人気なので中々手に入らない

レンク「トオゲンの抹茶玄米茶をですかっ？！」
…ここまで反応するのか
レイファー「ああ、どうかな？」
レンク「是非お願いします！」

目の前にトオゲンの抹茶玄米茶で容れたお茶がある
レンク「（ゴク）い、いただきます」
湯飲みを持ちお茶を飲んでいく。ほどよい苦味がうまいな

レンク「…美味しい、美味しいです、元帥」
レイファー「はははは。そうか、それは良かった…そうだ！」
お茶を飲み終えたレイファーはソファーから立ってキッチンに向かう。タッパにトオゲンの抹茶玄米茶の茶葉を入れる。再びソファーに向かい座ってレンクにタッパを渡す

レイファー「トオゲンの抹茶玄米茶の茶葉を入れておいた、持っていけ」
レンク「！よ、よろしいのですか？！」
レイファー「世話になっているからな」
レンク「ありがとうございますっ！！」
タッパをレンクは受け取った。仕事に戻っていいように伝えレンクは出ていく

ちなみにレンクがトオゲンの抹茶玄米茶をレイファーから貰ったことをジンクロウが知ったら羨ましがられた

7話　蒼天の翼、仙女ホウメイと出会う　前編（後書き）

ちなみにトオゲンの抹茶玄米茶はロウエンもよく飲んでいます

7話　蒼天の翼、仙女ホウメイと出会う　後編

翌朝の８：３０にレイファーは、自室の扉を開ける。レンクと護衛部隊の５人の兵士がいた

レンク＋兵士達「「「「「「「おはようございます、レイファー元帥！！」」」」」」」

レイファー「ああ、おはよう」

…ぴったり揃っていたな

レイファー「さて、これからコンロンに向かう。護衛を任せたぞ」

コンロンに向かったレイファー達は時々出てくるモンスターを討ちながら休憩地点のラゴウの村に向かっていた

レイファー「（中々の実力者を選んだな…）レンク、中々の実力だな」

歩きながらレンクにレイファーが尋ねる。実際選ばれた彼らは一般兵に比べて非常に強い

レンク「そう…でございましょうか？」

レイファー「ああ…自信を持っていい」

レンク「ありがとうございます！」

返事を聞いて歩いていると不意に殺気を感じた。思わず腰に備えてる天空蒼翼刀を構え、前を歩いているレンクの前に出て

レンク「レイファー元帥?!」
レイファー「下がっていろ、紅陽鳥!!」
驚くレンク達を余所にレイファーは赤い鳥の斬撃波、紅陽鳥を放つ。
木や草むらを通り抜けて

ドォォォン

と、何かにぶつかった音を立てる。殺気は一層強くなり、レンク達も殺気に気付き武器を構える。ズンズンっと大きな足音が聞こえ、殺気の正体が向かってくる

「ガアァァァ!」
レンク「ファイアドラゴンだと!!、この辺では見かけない筈だぞ!」体格のいいファイアドラゴンが牙を剥きながら現れた

レイファー「(今のレンク達の実力では討伐は無理だな…)お前達は下がれ、私が相手をする」
レンク「くっ…レイファー元帥、申し訳ありません……」
そう言うとレンクと護衛の者達が悔しそうな顔をしながら後方にさがる。レンクと護衛部隊の中から選ばれた者達は実力はあるがドラゴン系統のモンスターとはまだまだ実力不足とわかっているからだ。
そう思いながら目の前のファイアドラゴンを睨む
レイファー「こい…」

ファイアドラゴンがお得意のブレスを吐いてくる。それを左に避けて地斬疾空刀を放つ。ヒットはするが大したダメージは期待できない

レイファー「硬いな…」
「ガオォォォ！！」
ファイアドラゴンが手で殴ろうとし、避けて攻撃しようとしたが、ドラゴンの尻尾が追撃をしてくる

レイファー「ちい」
避けられないためガードするがやはりある程度はダメージをもらう。狙ったようにブレスが飛んでくるがレイファーは絶氷刃でやり過ごす

レイファー「準備運動は終わりだ…」
ファイアドラゴンの懐に急接近し、ガルダウイングで攻撃しながら上空に移動して距離をとる。ファイアドラゴンはガルダウイングのせいで体制を崩していた。天空蒼翼刀をしまいレイファーはファイアドラゴンに目を向ける

レイファー「リミット解除！」
身体に青い闘気を纏い翼で羽ばたきファイアドラゴンに構える

レイファー「いけい！！」
青龍鱗を無数に放つ。ファイアドラゴンに直撃し

「グオォン！！」
苦痛に叫びながら土煙が立ち、レイファーはその中に突入する。白虎咬や足技で攻撃し土煙の中から追い出す

レイファー「はっ！せい！はあぁ！」
追い出したら再び白虎咬や格闘術で殴り、蹴りを繰り返す。強いアッパーを決めて上空に追いやり

レイファー「コード麒麟！」
肘に青い闘気で構成されたブレードが発生し上空から落ちてくるファイアドラゴンに向かう

レイファー「ぬおぉぉぉぉぉぉ！！」斬り抜く。斬り抜かれたファイアドラゴンは悲鳴を上げずに絶命する

レイファー「ふぅ」
地面に足を着きほっと一息つく

レンク「レイファー様、ご無事ですかっ？！」
後方に下がらせたレンク達が私の無事を確認しながら駆け寄る

レイファー「ああ、無事だ。お前達は？」
レンク「大丈夫です、お手をかけてしまい申し訳ありません！」
護衛の者達が頭を下げる

レイファー「気にするな、ドラゴン系統のモンスターが出たのは、予想していなかったからな」

レイファー「ついたな…」ファイアドラゴンとの騒動が終わり、ラ

ゴウの村で一休みをして、再びコンロンに向かう。しばらくすると霧が覆うコンロンについたレイファー達。あたりを見渡してると五獣将のヒョウウンがこちらに向かってきた

ヒョウウン「お待ちしやした大将、こちらです」ちなみにレイファーはセイランの者からよく大将と呼ばれている

コンロンを進み初めて数分たつと洞窟が見えた。
ヒョウウン「こちらですぜ」

中に入って行くと、中には竜泉郷があり先には背が小さい女がいた。見た目は人間だが実際は竜人の亜種、ドラグネレイドの仙女ホウメイがいた

ホウメイ「ご苦労じゃったな、ヒョウウン」
レイファーと護衛を連れて来たヒョウウンに言葉を掛ける

ホウメイ「…お主が心剣士か」レイファー「はい、セイラン王ロウエン様より、セイラン軍元帥を任されている心剣士、レイファー・ソウキュウです」
ホウメイに頭を下げて挨拶をするレイファーにホウメイは

ホウメイ「真面目じゃのう…」
ヒョウウン「確かにそうっすね」

ホウメイとヒョウウンがそうレイファーに伝える

レイファー「そうか…確かにそうかもしれんな。飲みに行くのもシュマリとエンウとジンクロウが主だからな」
その言葉にヒョウウンが

ヒョウウン「真面目なメンバーばっかすね大将」
レイファー「ああ、特にエンウとはよく飲むな」

その後、世間話をしながら時間は過ぎていきレイファーはセイランに戻った

セイランに戻ったレイファーはロウエンから任された仕事のため、軍学校にきて最上級生の様子を見ていた

レイファー「最上級生の様子はどうかな？」
校長「まだまだですな。ですが、最近は自主練習をする者が増えてきているため、伸びはいいでございます」

自主練習が増えた理由を聞くと、あの演説が理由らしい。少し恥ずかしい思いをしながら視察を終えて、ドレイク城の門を潜ろうとした。するとギデア陣地を守護してるエンウの部下の赤い鳥人が急いだ様子で向かってきた

セイラン兵「ああ、レイファー様、大変です！！」
レイファー「何があった？」
落ち着いて話を聞く

セイラン兵「は、はい。ギデア陣地付近でカオスゲートが発生しました！！」
その言葉に驚く

レイファー「カオスゲートが？！……わかった。門番よ、王に事情を説明しておいてくれ（えぇい、シュマリがセイランを離れている時に限って…）」
門番１・２「はっ！！」
レイファー「直ぐに向かうぞ、案内を任せた！」
セイラン兵「はい！！」

レイファーは兵に案内されながらギデア陣地に向かった

7話　蒼天の翼、仙女ホウメイと出会う　後編（後書き）

軍学校のほとんどの生徒達がレイファーに憧れてます

8話　第2のパートナーと哀れな虎（前書き）

新しいパートナーが出てきます

8話　第2のパートナーと哀れな虎

兵に案内されながらギデア陣地に向かうレイファー

レイファー「状況はどうなっていた？」
セイラン兵「確認しているカオスゲートは5つです。また、モンスターも現れており対応しています」

状況は不味かった。1つ程度ならなんとかなるが、カオスゲートは5つある、心剣士がいるなら話は別なんだが、更にモンスターも現れてるため非常に厄介だ。実力があるエンウとその部下だからと言って油断はできない
レイファー「飛ばしていくぞ！！」
エンウ…保たせろよ

エンウｓｉｄｅ

カオスゲートが5つも発生し、更にはモンスターも現れ、状況は不

味い。
部下にレイファー殿を呼びに行かせ、拙者達はモンスターの相手をしていた

エンウ「鳳凰炎弾！」
鳳凰炎弾を射ちながら迫りくるモンスターを鳳凰円月刀で斬る。部下達には1人で行動しないようにと、カオスゲートに近づかないように指示を出す
「ガアァ！」
セイラン兵「ぐうぅぅ！！」
モンスターに攻撃され、部下が足を負傷し、そこにモンスターが迫る
エンウ「えぇい、鳳凰天駆！」
レイファー殿にご教授してもらった鳳凰天駆でモンスターを凪ぎ払う

「エ、エンウ様！！」
エンウ「下がってろ、拙者がやる！」
モンスターを斬り、鳳凰炎弾を射ちながら、部下が後退するのを確認しながら再び鳳凰天駆でモンスター達を凪ぎ払いながら斬る。魔導士達が魔法で援護してくれるため数は減ってきた

まだなのか…レイファー殿

「グオォォ！」
油断したのかモンスターが腕を振りかざそうとしていた
エンウ「（くそ、拙者としたことが）」
斬るのは間に合わないため防御でやり過ごそうとした時に

レイファー「紅陽鳥！」

エンウｓｉｄｅ

レイファー「紅陽鳥！」
ギデア陣地に到着したレイファーは、エンウに襲おうとしてるモンスターに紅陽鳥を放つ。モンスターが悲鳴を上げながら消滅した

セイラン兵「レ、レイファー元帥！」
レイファー「エンウ殿、無事か？」
エンウ「うむ、負傷者はいるが大丈夫だ、カオスゲートはあちらに…」
エンウが指差した方向には５つのカオスゲートがあった
レイファー「闘うぞエンウ殿、カオスゲートの前にモンスターを討つ！」
まだいるモンスターを討つため天空蒼翼刀を構える
エンウ「承知した！」

レイファー「せいっ！はっ！」
エンウ「もらった！」
レイファーが来たことにより士気が高まり、周りの兵達がモンスターをどんどん討つ

敵を討ちながら背中を合わせるレイファーとエンウ
エンウ「数は少なくなったな」
レイファー「これだけの数ならば兵達だけで何とかなるが…」
カオスゲートに方を見て
レイファー「心剣なしでやるしかないか……」

レイファーの言葉をを聞いたエンウは
エンウ「（心剣か。拙者からも抜ければ力になれ、レイファー殿の負担も減るというのに…）」

悔しさで鳳凰炎月刀を握る手に力がこもる
エンウ「（拙者に…何かできることはないのか！？）」
そう思った時だった

パアァァァ

赤い光と陣がエンウの胸から発生し、剣の柄がでてきた
エンウ「これは？！」
レイファー「心剣…」
エンウの胸から出てる剣の柄を握る

レイファー「炎のように熱く、主のために闘う誇り……これがエンウ殿の心なのか…」

エンウ「抜かぬのか…」
レイファー「ふっ、抜かせてもらうさ友よ」
その言葉と共に柄を強く握り締め引き抜く

エンウから引き抜いた心剣は、キリヤがジンクロウから抜いた心剣、天剣エクナバードと似ていた。刃身が炎のように赤く、刃が生えてる場所から赤い一対の翼が生えている。鳳凰のイメージだ。心剣を抜いたことに周りの兵達が驚いており、モンスターはどうしたかと思ったらこの場にいるモンスターは倒したらしい

レイファー「さて、エンウ殿よ」
エンウ「うむ」

レイファーは心剣を構え
エンウは鳳凰炎月刀を構える

レイファー「私とエンウは、これよりカオスゲートに突入する！！」
エンウ「お前らは、警戒体制をとって待機だ！！」
セイラン兵「「「「了解！！」」」」

2人はカオスゲートに向かって行った

カオスゲートの中に入ると周りは紫や黒い色をした空間で、ガラスのような物が無数に浮かび、足場はそのガラスような物で出来ていた

エンウ「ここが、カオスゲートの中か…」
周りの光景を見ながらエンウが呟く
レイファー「ああ」
エンウ「どうやって封印浄化するのだ？」
レイファー「封印浄化は至って簡単だ」
「「「「ゴアァァァ！」」」」
待っていたかのように灰色のモンスター達が現れた

レイファー「こやつらを討てばいい」
エンウ「簡単だな…」
シンプルなやり方に思わず呟く
レイファー「普通のモンスターと比べて強いのが特徴だ。そろそろ、戯言はやめよう」
エンウ「そうだな…」
視界に入るモンスターを睨み付けて

レイファー「ぬおおおおお！！」
エンウ「はあぁぁぁぁぁあ！！」
モンスターに向かって行った

ザシュ、キィン、ズバッ、ゴォォォ
「グギャアァァァァ！」
エンウ「もらったぞ！」
レイファー「そこだ！」
「ゲシャアァァァァ！」

2人はカオスゲート内のモンスターを圧倒していた。モンスターが近づけば斬り、集まったら鳳凰天駆で凪ぎ払い、距離をあれば鳳凰炎弾と紅陽鳥で攻撃し状況は優勢だ

レイファー「はあっ！」
モンスターの攻撃をバックステップで躱して、頭に刃を振り下ろして真っ二つにしたら次のモンスターに向かう
エンウ「鳳凰炎弾！」
お得意の鳳凰炎弾で敵を討ち、迫りくるモンスターを斬り伏せる。

この状態をしばらく続け４つのカオスゲートは封印浄化された。２人は最後のカオスゲートの封印浄化を行うとしていた

レイファー「これで最後のカオスゲートだ」
エンウ「うむ、行くぞ」
最後のカオスゲートは、今までとは違い、ファントムモンスターが大量に出現した

エンウ「先に仕掛けるぞ、鳳凰炎弾！」
モンスターが集まっている場所に鳳凰炎弾を射ち込む。これにより、何体かのモンスターが消滅し、集まっていたモンスターがバラバラになる。そこを狙ってレイファーとエンウは斬り込む

エンウ「はあ！」
上空からモンスター斬り伏せながら、鳳凰炎弾でレイファーを援護する
レイファー「もらった、旋炎刃！」
天空蒼翼刀が炎に包まれ、大振りで横に斬ろうとする。そこを狙ってモンスターは、攻撃しようとするがエンウが鳳凰炎弾で足止めをし、大振りの旋炎刃が多くのモンスター斬った
レイファー「ぬおぉぉぉぉ！！」
「「「ギャオォォォォ！！」」」
大振りの旋炎刃で数は減ったがまだモンスターがいた。その時レイファーは、あれでモンスターをまとめて倒そうと思いエンウに伝える

レイファー「エンウ殿、鳳凰天駆で行くぞ！」
エンウ「承知！」
モンスターとの距離を取ると武器を構えて

レイファー「終わらせるぞ、エンウ殿！」
エンウ「行くぞ、レイファー殿！」
群がっている残存モンスターに2人は攻撃を仕掛ける

レイファー・エンウ「「鳳凰天駆！！」」2人の攻撃でモンスターは消滅し、カオスゲートは封印浄化された

「エンウ様と元帥様はご無事だろか…」
カオスゲートの封印浄化に2人で向かったエンウとレイファーに心配する兵に
「あの方々なら大丈夫だろ…」
近くの兵が返事をする。カオスゲートに突入してから30分は既にたったが、エンウとレイファーは、まだ戻らなかった

「ん、あれは！？」
「エンウ様と元帥様だ！！」
待機をしていた兵達の元に、カオスゲートの封印浄化をしていたエンウとレイファーが戻ってきた

エンウ「お前達、大事はなかったか？」
「はい、其方は…」
レイファー「ふっ、封印浄化は成功だ」
カオスゲートの封印浄化を出来たと聞いて兵達はほっとしたようだ。すると1人の兵が近づいてきた

エンウ「どうした？」
「はっ、ジンクロウ様が兵を連れて、おみえになっております」
エンウ「通してくれ」
兵にジンクロウ達を連れてくるように頼んだ。暫くするとジンクロウが部下を引きつれてやってきた

ジンクロウ「終わったようだな」
レイファー「ああ、エンウから心剣が抜けてな…」
ジンクロウ「む、そうなのか。まあいい。拙者達は、王の命により後始末の手伝いと、看護兵を連れてきた、負傷者の治療に宛てる。

エンウとレイファーは王がハンヨウに戻ってこいと言っていたぞ」
エンウの部下達は、ジンクロウ達と共に警戒や負傷者の治療に当たるようになった

ハンヨウに戻ったエンウとレイファーはカオスゲートのことを、報告するため城に向かった

ドレイク城玉座の間

エンウ「カオスゲートは近づかなかったり、触れたりしなければ大丈夫だったのですが、発生したのは突然でしたので軽い混乱がありました。負傷者は居ますが、死者はおりません」
ロウエン「わかった。ギデア陣地に連れていく兵の数を増やしていけ。それと、ご苦労だったな2人共、今日と明日は仕事をせずにゆっくり休め」
エンウ「はっ！」
レイファー「了解！」
今日と明日はゆっくりして、明後日から仕事をするように言われ、2人は下がった

下がった2人はレイファーの自室に居た

レイファー「何かを飲むか？」
エンウ「珈琲をブラックでもらおう」
ブラックの珈琲を入れてソファーに座り、雑談する

レイファー「今日と明日は休みだな」
エンウ「うむ、ゆっくりできる」

ズズッ

ブラックの珈琲を飲みながら話をする

レイファー「鳳凰天駆、なかなかさまになったな」
エンウ「レイファー殿にそう言われるとは、ありがたい……それにしても良い味だな」
珈琲の味が良いためエンウが呟く

レイファー「トオゲンのやつを使ってるからな」
エンウ「それならこの味も納得だな」
レイファー「それと最近、あいつはどうだ？」
レイファーがエンウに尋ねる

エンウ「ライヒのやつか、もう少し利口になってくれればよいのだがな…」
思わず愚痴ってしまう
レイファー「まあ、その分部下の面倒見がいいし、そんなとこがライヒのいいとこだろう」
実際そう思っているレイファー

エンウ「旨かったぞ。珈琲、またもらえるか？」
レイファー「いつでもいいぞ」
エンウは立ち上がり部屋から出ていった。エンウが出ていった後、コップを片付けて本を読みだした

暫くして、ふと時計を見ると時刻は１９：００になっており夕食を食べるため大食堂に向かった

大食堂

大食堂は、大勢のセイラン兵、上層部の者達が使用するためかなり広い
レイファー「（今日は刺身定食にするか…）刺身定食を１つ」
「あいよ」
大食堂のおばさんが返事をし刺身定食の準備をする。
「お待ち」
お盆に乗せて差し出された刺身定食を受け取り空いてる席に座る

食事をしていると

???「お疲れさまじゃのう、レイファー」
レイファー「コウリュウ殿、相変わらずお元気ですな」
コウリュウ「まだまだ姫様のためにやれるわい」
その後コウリュウ殿と話をしながら食事をした。食事を終えて容器をおばさん達の所に直し自室に戻った私は風呂の準備をする。準備ができたため大浴場へ向かう

大浴場

ここ、大浴場も大食堂と同等の理由で広く、湯船も非常に大きくて一度に大勢の人数で入浴できる

「レイファー様も風呂っすか？」
レイファー「ああ、今からそうだ」
衣服を脱ぎ脱衣籠に入れ、戸を開けて中に入る。中には既に大勢の獣人達がおり、それぞれ寛いでいた

椅子に座りシャワーを浴びてトリートメントを付け、全身が泡で包まれて羽毛に染み渡る。ちなみにエルデではトリートメント代がかなりかかっていたが、このセイランではトリートメントが安く、更にドレイク城の大浴場で、使用するトリートメントは無料だ
（非常に助かっているぞｂｙレイファー）

シャワーで身体中の泡を落としたら湯船に浸かろうと足運ぼうとしたら

ライヒ「大将、今から湯船っすか？」
レイファー「ああ、身体は洗い終わったからな」
ライヒに話し掛けられた。ライヒ「（そういや、大将と風呂入ったことなかったな…）」
そう思いながら視線を下に下げる

・・・・・・・・・・で、

ライヒ「（でけえぇぇ。めっちゃでけぇよ！！）」
思わず心の中で突っ込んでしまう
？？？「どうしたのだ、ライヒよ」
レイファー「エンウ殿」
そこにエンウが現れ、レイファーの隣に立つ。そんな時にライヒは
また

ライヒ「（そういえば兄じゃのやつもでかいんだった――――）」
エンウ「様子がおかしいな…」
レイファー「んっ？」
ライヒの様子がおかしく視線を辿ると

こそっ
レイファー「エンウ殿」
エンウ「如何したレイファー殿？」
レイファー「ライヒの様子がおかしい理由は多分」

ゴニョゴニョゴニョゴニョゴニョゴニョ

エンウ「成る程、そういうことか。ライヒよ」
ライヒ「（はっ）…な、何だよ兄じゃ」

ライヒの肩に手を置いて

エンウ「お前のも、大きくなるだろう……多分な」
ライヒ「慰めないでくれ兄じゃぁぁぁぁぁ！！」
レイファー「……（哀れんだ視線をライヒに向ける）」
ライヒ「大しょぉぉぉぉぉぉ、お願いしますから、そんな哀れんだ目で俺を見ないでくださいよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

ちなみにエンウとレイファーのを見た風呂場にいる者達は、暫く自分に自信が持てなかったそうですよ

ライヒさん（笑）

ライヒ「笑うんじゃねぇぇぇぇぇぇぇ（泣）」

8話　第2のパートナーと哀れな虎（後書き）

執筆していてライヒが非常に哀れに思えた

9話　蒼天と雷、第3のパートナー

レイファーが休みを貰って翌日

レイファー「さて、どうしたものか…」

正直に言おう、休みを貰っても何もすることがない

…そう言えばラゴウの村にある菓子屋に新作が出たらしい

買いに行くか

ハンヨウを出てラゴウの村に向かうレイファーは菓子屋に何が入ったか考えていた

カステラ？いや、大福かもしれんな…

私がそう考えながら歩いていると

「あれ、大将じゃないすか。何をしてるすか？」
ライヒ何をしてるんだこいつは

カヌート「ラゴウの村の菓子屋に新作が出たから、買いに行くのだ」

そう言えばお茶請け用の菓子も少なかったな、ついでに買っておこう

ラゴウ村まで後十数分か……む、モンスターの気配を感じるな

このまま戦闘になる可能性があるな

レイファー「ライヒ、武器を構えろ」
ライヒ「武器っすか……成る程、そういうことっすね」

どうやらライヒもモンスターの気配に気付いたようだな

そのまま歩いていると気配を感じていたモンスターを見つけた

ってドラゴンではないか

ライヒもちょっとびっくりしているようだな

レイファー「さて、どうするライヒ」

ライヒ「何言ってるんすか大将、やるに決まってますよ」

確かにこのままにはできんからな

ライヒから心剣が抜ければ楽なんだが

パアァァァ

ライヒ「な、心剣じゃねぇか！」

これは…心剣

ちょうどいいな使わせてもらう

ガシッ

ライヒの胸から出てる柄を握る

レイファー「猛々しい雷…借りるぞ」

ライヒ「俺も大将のパートナーか……へへ、お安い御用です」

ライヒが笑っているな。

心剣が抜けたことが嬉しいのか？

柄を握る手に力を込めて心剣を引き抜く

ガシャン

これは…大きめな雷の刃だな

ライヒの心剣を右手でしっかりと握り

レイファー「ライヒよ、行くぞ」

ライヒ「おうよ大将！」

俺とライヒはドラゴンに向かって行った

ドラゴンも気付いてブレスを吐いてくるがそれを躱す

そんな大振りが簡単に当たるものか

私は早く新作の菓子を食べたいのだよ

レイファー「ライヒ、一撃で決めるぞ」

ライヒ「分かりやした！」

受けろ

ライヒ「猛虎雷撃！！」
レイファー「襲爪雷斬！！」

ドガガァーン

ギャオォォォォォォ！

フルパワーで使った猛虎雷撃と襲爪雷斬で一撃だ

ライヒの心剣はパワータイプみたいだな

さて、行くか

ライヒに心剣を戻し武器をしまって私達はラゴウの村に向かった

ラゴウ村に着いた私達は菓子屋に向かう

私達を見ると店員が頭を下げる

「いらっしゃいませ、ライヒ様は何時ものやつですね」

ライヒ「おう」

ライヒ、お前は何時もの…ってうまい棒に鈴カステラだと！！

懐かしいものを見てしまった

「レイファー様は新作のやつですね」

レイファー「ああ、それと大福と煎餅も頼む」

大福と煎餅はお茶請けに使うからな

菓子を受け取り料金を支払って店を後にする

そのままライヒと共にドレイク城に戻った

余談だが新作の菓子は羊羹だった

１０話　狂嵐と相談、第４のパートナー

季節が冬になってクリスマスは先日終わり休暇中の私は現在、休憩中のバソウと休暇中のヒョウウンがいるコオウカンに来ている。

正月にある祭りでヒョウウンと一緒に屋台をするらしいのだがアイデアを出すため相談に乗ってもらいたいらしい。セイランの祭りなどで屋台など出店をやる場合、ペアを組んで行うことが多い。ペアは私とコウリュウ殿、シュマリとジンクロウ、エンウ殿とライヒ、バソウとヒョウウンだ。

ちなみに私とコウリュウ殿はドリンクと菓子類、シュマリとジンクロウはお好み焼きとたこ焼き、エンウ殿とライヒは焼きそばと焼きうどんだ

人馬兵に案内されバソウ、ヒョウウンと対面する

バソウ「レイファー、貴方は何がいいと思う？」むぅ、そうだな……色々と思いうかぶのだが

レイファー「どういったのがいいんだ？」

実際に二人はどういった出店をやりたいのか聞かないとな

ヒョウウン「そうだなぁ…手軽に食べれる物とかが良いすね」

手軽になら
レイファー「それならイカ焼きに焼きトウモロコシとかはどうだ？」
実際にエルデではマイナーな出店だったぞ。
それにセイランではイカは安いし、トウモロコシは収穫量が多い

バソウ「イカ焼きに焼きトウモロコシか…」
ヒョウウン「悪くねぇなバソウ」
どうやら二人はそれに決めたようだ

レイファー「味付けは自分達で決めろ」
こればかりは自分達で決めないとな。流石にそれぐらい理解していてくれた

ヒョウウン「ふぅー、やっと決まったぜ」
バソウ「長い時間が掛かったな…」
…どれだけ悩んでいたんだこの二人は。
少し遠い目をしている二人を見てそう思いながら出されている麦茶を飲む

ヒョウウン「あ、そろそろ俺は帰るぜ」

ヒョウウンが立ち上がり私とバソウに挨拶をして帰っていく

さて、私もそろそろ帰るかな。
席を立ち上がりバソウと向き合う

バソウ「今日は貴方のお陰で助かった」

頭を下げてお礼の言葉を私に掛けるバソウ。
これは滅多に見れない光景だな…

レイファー「此方もいい時間を過ごさせてもらったよ、バソウ」

私は手を差し出し、バソウも手を差し出して握手をする

パァァァ

バソウの胸から光が溢れ柄が出てきた

心剣だな…

バソウ「ふ、ふふ。俺から心剣が抜けるか…抜いてくれ」

その言葉を聞くと共に私は柄を握り締める。
…荒々しくも純粋な心。ふっ、バソウらしいな

レイファー「借りるぞバソウ、貴様の心！」
強く言い放つと同時に柄を引き抜く

引き抜いた心剣は、普通の剣の形をしているが刃の先が槍のようになっており、刀身が長い

バソウ「…槍のような心剣だな」
確かにな。
これはスピードを重要視し、攻撃範囲の広い心剣だ、見て分かる。

心剣を握ったまま、私はバソウに言葉を掛ける

レイファー「何かあったらよろしく頼むぞ」
するとバソウはにやりと笑い
バソウ「此方も頼む。レイファー」
…やっぱりバソウは戦い好きだな…

そう思いながら心剣をバソウに戻して、私はハンヨウに帰った

11話　祭りの準備

新年が後、数日となり各自正月に向けて準備をしていた

レイファー「…では大福とお汁粉とクッキーにしましょう」

私は自室にてコウリュウ殿と出店で出す菓子類を決めていた

コウリュウ「そうじゃのう、クッキーもあったら小さい子も食べれるからそれでいいかのう」

菓子類は決まった。だが、まだ出すジュースが決まっていない

ドレイク城の大きな広間を借りて私とコウリュウ殿、部下達でジュースを作って試飲することにした

今、私の目の前には多数の果物、調味料、水や牛乳等の飲料水がある

レイファー「では、何個か作ってくれ」

部下達にジュースを作るように指示を出す

しばらくするとレンクを含む部下達が何個か作って持って来た。
……レンク、お前も作ったのか

その一
フルーツミックス

鮮やかな色をし、様々な果物の匂いがする
…これは美味しそうじゃないか
コウリュウ殿を見ると満足しているな。

その二
アップルジュース

随分とシンプルなジュースだな。味もいいし材料費も安い
子供でも飲みやすいだろう

その三
ピーチジュース

なかなかの味だ。だが、コストが高い

その四
オレンジジュース

これはいいな。幼児でも非常に飲みやすい

その五
イチゴオレ

個人的に好きなのだが甘いな。イチゴの値段を考えてみると

合計五つのジュースの試飲が終わった。
現在はコウリュウ殿と広間から離れて出すジュースについて話す

レイファー「さて、どうしましょうか」

私としてはオレンジジュースがいいな。幼児も飲みやすくて味はよく、コストも安くすむ

コウリュウ「一つだけではなく複数決めた方がいいと思うんじゃが」

複数か…ならば年齢に関係なく飲みやすいやつがいいだろう

それから数分話し合いをして販売するジュースが決まった。
アップルジュースとオレンジジュースだ

コストは安く、味も良くて年齢に関係なく飲みやすい。
これなら祭りも大丈夫だろう

なお、レモンジュースの案があったが却下した
（酷い味だったｂｙレイファー）

12話　年越し、そして正月祭り　前編

レイファー「いよいよ明日か」

自室で酒を飲みながら外を眺め、ついつい呟いてしまう。

…外を見ながら酒を飲む癖、やめられんな

コンコン

んっ、こんな時間に一体誰だ？

レイファー「開いているぞ」

コップに酒を注ぎながら私は訪問者に部屋に入るように促す

王…違うな。一体……

シュマリ「まだ、起きているなレイファー」

誰かとおもったらシュマリか…一体どうしたんだ

すると私が疑問に思っているのを察知したのか

シュマリ「年越しに飲まないか？」

構わんな…一人で飲むよりいいだろう

シュマリは向かい側のソファーに座り、私は余りのコップを渡す

シュマリ「…もう半年ぐらいだな。お前がセイランに来て」

そう言うとコップに注いだ酒を飲む

半年…か。

もうそんなに時が経ったのだな…

レイファー「ああ懐かしいよ」

エルデより此方での生活は充実している。

窓から見える月を見ながらそう思い、酒を飲む

私が酒を飲み初めて時間が経ってきたころ、酒は無くなり雑談をシュマリとしていた

シュマリ「さて、そろそろ戻らせてもらう」

そうだな、明日は屋台のこともあるからな。

私にまた明日と言ってシュマリは出ていく

レイファー「（明日は、忙しいな）」

そう思いながらベッドに寝転がり眠りについた

12話　年越し、そして正月祭り　後編

翌日

ロウエン「お前達、存分に楽しめぇぇぇぇぇ！」

王の挨拶と共に新年正月祭りが始まった

さてと、店の状況を確認する

先日に考案したジュースは、何時でも生産出来る状態、ジュースの数も揃って、茶菓子の準備も出来た

後は、開店時間を迎えるだけだ

レンク「レイファー様、開店時間になりました」

レイファー「では、やりましょう。コウリュウ殿」

コウリュウ「うむ、売れるといいのう」

二時間後

レイファー「意外に売れますな、コウリュウ殿」

コウリュウ「そうじゃのぉう」

売れ行きは好調だな
私は店を見て回りたいよ

「レイファー様ぁぁ！」

何だ、何かあったのか？

「只今、叩いて被ってじゃんけんぽんの大会出場メンバーを募集していますが、出られますか？」

・・・孤児院以来だな

コウリュウ「ここは、ワシに任せて行ってきたらどうじゃ？」
まあ・・・いいだろう

レイファー「わかった、私も出よう」

「有り難うございます。こちらです」

その後叩いて被ってじゃんけんぽん大会は盛り上がり、夕暮れに成るまで、騒いだ

余談だが、コウリュウ殿が酔っ払って、後始末が非常に大変だった

13話　家を購入

新年が過ぎてしばらくするとあることを思う

レイファー「そろそろ家を購入するか・・・」

エンウ「家か・・・」

シュマリ「そういえば、レイファーは城に寝泊まりしていたな」

そう、私は今まで城に寝泊まりしてきたのだが、荷物が増えてきたのでそろそろ家を購入する必要が出てきた

レイファー「む、この物件は・・・」

中々いい物件だな

市場との距離が近い、これにするか

エンウ「拙者の家と近いな、荷物の持ち運びは手伝おう」

感謝するぞ、エンウよ

後日、家を購入しエンウ殿と共に荷物を運んだ

因みに、付近にレンクの自宅もあった

１４話　シュマリ三頭会談に向かう

時は経過し、私は２４歳になっていた

数ヶ月前に王は腕利きの部下達を引き連れて航海に旅立った

そして今、聖フィリアス王国のレオン王子から手紙が届いている

三頭会談だ

シュマリ「分かりやすく言うなら、今、リーベリアは気温が可笑しく、カオスゲートが多発している為、三国一つとなってこの問題に対応すべきだ、その為に三頭会談を行いたい・・・だそうだ」

そう、最近気象がおかしくなったりしている。そのせいで、水不足が最近目立ってきているのだ

レイファー「ふむ、三頭会談か・・・場所は何処なのだ？」

シュマリはもう復讐に捉われてはいないから、上手く行けばいいのだが

シュマリ「ヴェンティ古戦場跡、準備はフィリアスがするそうだ。これから会議になるよ」

会議が、いい方向に向かえばいいのだが

会議の結果、この申し出を受けることになった

シュマリは直ぐに返事を書き、部下に返事を書いた手紙を渡し、護衛を着けて、フィリアスに向かわせる

レイファー「しかし、三頭会談か・・・上手く行けばいいな」

シュマリ「だが油断はならん。特に、アストライアはな」

レイファー「油断はするなよ・・・」

私も向かいたいのだが仕事があるので向かえない。幸いだがレンクにシュマリの護衛を任せている

シュマリ「大丈夫だろう。ジンクロウもいるし、お前の部下のレンクもいるのだ。ハンヨウの防衛は任せたぞ」

ふっ、任せてもらおう

友よ

15話　最悪の結果

シュマリが三頭会談に向かって数時間後・・・

レイファー「はぁ、無事に行われているのか・・・心配だ」

「大丈夫でしょう大将。何かあったらライヒ様、バソウ様が近くで待機してますし」

レイファー「それもそうだな・・・お前の名は？」

この虎獣人の部下、気に入ったよ

「へい、エントと言います」

レイファー「エントか・・・見回りに行くぞ」

エント「わかりやした」

レイファー「町も少し緊張しているな」

エント「そうっすね、三頭会談がどうなるか気になっているからだと思いますぜ」

それもそうだな
気になるのも無理はない

いい方向に向かってくれると良いが・・・

ふと、時間を見るともう昼の時間になっていた

レイファー「む、そろそろ昼だな・・・一時間後にこの広場に戻ってこい」

エント「わかりやした、失礼しやす」

さて、私も食事を取るか

食事を取り、広場で休んでいたら

エンウ「レイファー殿、見回りか？」

エンウ殿がいた

レイファー「ああ、見回りだ」

話を聞くと、今日の自分の仕事は終わり、副官任せて戻ってきたらしい

エンウ「・・・嫌な予感がするな」

三頭会談のことが互いに気になっているのか話し掛けてくる

レイファー「そうだな。どうも嫌な予感がする・・・」

「お待たせしやしたー大将」

ん、エントか
来るのが早いな

エント「お疲れっす、エンウ様」

エンウ「うむ」

・・・なんとなくライヒに似ている気がするな

そう思ってしまい、見回りを再開しようと思った

「・・・ウ・・・ファー・・・」

レイファー「む？」

「レイファー様、エンウ様！」

前方から兵が大急ぎで私に向かってきたが・・・何かあったのか？

「大変です！三頭会談が行われている場所にカオスゲートが発生、アストライアのセレスティア様、フィリアスの国王とレオン王子が死亡、かなりの被害が出ております！」

エンウ「なに！？」

カオスゲートが発生・・・まずいな

レイファー「・・・悪い予感が当たったか。私は今から現場に向かう。エント、急いで城に戻り、私の部隊にヴェンティ古戦場跡まで大至急向かうように伝えろ、急げ！」

エント「わかりやした、大至急お伝えします！」

エンウ「拙者も向かおう。急ぐぞレイファー殿！」

レイファー「わかっている！」

エンウ殿から心剣、鳳凰剣カテドラルを抜いたら大急ぎで、現場に向かった

16話　一年後

三頭会談の事件から一年が経過した現在、リーベリアの三国の仲は悪くなり、交流は途切れてしまった。

それだけならまだしも、三頭会談の事件の影響で険悪な雰囲気のせいか、カオスゲートの発生が多くなってきた。

心剣士の力を高める為にパートナー達と仲を深めたせいなのか、心剣をカオスゲートに突き刺すだけで封印浄化は出来るようになった。

だが、それでも私だけでは対処出来ない。

フィリアスの領土の方に発生したカオスゲートを封印浄化しに行くのはフィリアスに何をされるかわからない為、どうにも出来ない状態である。

セイラン国内だけなら何とかなるのだが・・・

レイファー「エント、この書類をシュマリに渡してきてくれ。」

エント「わかりやした大将。」

今渡した書類は各村で発生してる水不足についての書類だ。

節水やハンヨウから水を届ける事で被害は抑えられているが長くはもたん。

レイファー「せめて心剣士が他にも居ればよいのだが・・・」

王はまだ戻られない、ジンクロウは行方がわからなくなる状況だというのに・・・

くそ、タイミングが悪過ぎるぞ。

コンコン

レイファー「開いてる、入ってこい。」

入ってきたのは伝令兵か・・・慌てているがまた何か発生したのか？

伝令兵「報告します。ラゴウの村でカオスゲートが発生したと連絡があったのですが・・・」

レイファー「どうした、報告を続けろ。」

伝令兵「はっ、先程ラゴウの村でカオスゲートが発生したとの連絡がありました。ですがカオスゲートは封印浄化されたとのことです。」

封印浄化だと！！

私は何もしていないというのに。

レイファー「私以外の心剣士が現れたという事になるか？」

伝令兵「はい、現時点だとその可能性が高いかと思われます。心剣士とその仲間は現在、このハンヨウに向かって来てるとの事です。」

多分だがソウマとクレハの二人だろう。

始まりが近いな。

レイファー「この事を他の奴達は？」

伝令兵「宰相閣下、ヒョウウン様を除く五獣将の方々は知っております。」

ヒョウウンには情報が行き渡っていないのか・・・面倒な事になりそうだ

伝令兵「なお、心剣士と仲間の方がドレイク城尋ねられた場合ですが宰相閣下、元帥様、ヒョウウン様を除く五獣将の方々で挨拶をすると宰相閣下が言われてました。」

挨拶か・・・数年ぶりになるな、二人に会うのは。

レイファー「わかった、下がっていいぞ。」

しかしソウマとクレハが来るという事はフィリアスにも来ている可能性がこれはある。

取り敢えずはレンクと確認して明日らへんの予定を開けておこう。

レイファー「いい方向に向かってくれよ・・・」

民が不安になるのは避けたい。

ソウマ、クレハ・・・早くこい！

エンウ「カオスゲートの事は聞いたか？」

聞いているさ。
それは私以外の心剣士が来たことを意味する。
レイファー「ああ、心剣士が封印浄化した・・・のだろう。」
これで多少は被害が減るといいな。
そう思いながらエンウと共に大浴場で湯槽に浸かりながら思った。
レイファー「・・・もしかしたら私の知ってる者かも知れない。」
エンウ「知ってる者か・・・だとしたら懐かしい者に会うかもしれぬな。」
エンウが私に言いながら顎から生えており、湯で湿っている羽毛を触りながら呟く。
まあ、会ったその時に考えよう。
それにしても思ったのだが・・・
キリヤ・・・あやつはどうしているだろうか。

17話　久しぶりの再会

翌朝

私とシュマリは五獣将を会議室に呼んだ。

・・・ヒョウウンがいないな。

シュマリ曰く、この世の中だから仙女の護衛を怠る訳はいかないので離れさせていないだと。

レイファー「お前達も知ってると思うが先程、心剣士達が城を訪れた。」

シュマリ「これからお出迎えするが失礼の無いようにな。レイファーは宴の準備をするように言って後に来てくれ。」

シュマリｓｉｄｅ

玉座の間

今、私の目の前には心剣士である人間の男と心剣のパートナーである人間の女がいる。

名前はソウマとクレハらしい。

若いな・・・

ソウマ「えーっと、さっき言っていた元帥っていう人は？」

シュマリ「もうすぐ来ますので、お待ちください。」

この2人は驚くだろうな。レイファーが言っていたがソウマとクレハとは面識があったらしい。

レイファー「遅れてすまない、今終わった。」

・・・どうやら来たようだな。

ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

レイファー「遅れてすまないな、今終わった。」

宴の準備をするように指示を出して玉座の間に来た。

そこにはシュマリと五獣将と・・・懐かしい者が2人いた。

シュマリの横に立つ。

レイファー「遅れてすまんな。私がセイラン国の元帥を任されている者であり、心剣士であるレイファー、レイファー・ソウキュウだ・・・・・・久しぶりだなソウマ、それにクレハ。」

ソ・ク「「レ、レイファーさん！？」」

・・・想像していたがやはりこうなるか。

久しぶりだがこの場で喋るのはいかん。

レイファー「悪いが話しは後でにしてくれ。シュマリ、何処まで話した？」

シュマリ「自己紹介を終えた所だよ。ソウマ殿、クレハ殿、夜にはささやかではありますが歓迎の宴を催させていただきます。」

ソ・ク「「ありがとうございます。」」

シュマリ「それとレイファー。」

ん、シュマリは私に何か用があるのか？

レイファー「彼らと久しぶりにあったのだろう。話しをしてやれ。」

はあ、シュマリは余計なことを言ってくれるが・・・まあ、それも

いい。

レイファー「わかった。ソウマ、クレハ、私についてこい。」

久しぶりに茶でも飲みながら話しをするか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0549x/

蒼き鳥人な心剣士

2011年12月11日00時47分発行